

特定非営利活動法人（国税庁認定）

柔道教育ソリダリティー

第10回講演会

「英国帰国報告」

2年間の留学を語る」

井上 康生

（東海大学体育学部講師

シドニー五輪金メダリスト）

2011年6月5日（日）

於：国際文化会館別館講堂

開会あいさつと

パレスチナ柔道少年交流事業報告

山下 泰裕

理事長の山下泰裕です。本日はお忙しい中、NPO法人柔道教育ソリダリティー10回目の講演会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

今回は、私の教え子でもある元オリンピックチャンピオンの井上康生が2年間にわたるヨーロッパ研修を終えて帰国しましたので、その報告を兼ねて講演させていた

だきます。彼を「先生」と呼ぶにはあまりに他人行儀なのでいつもどう呼んでよいのやら分からず、教え子以来の「康生」と呼んでいます。しかし本日は、「井上康生先生」として講演していただきます。

それに先立ち、まず昨年実施したパレスチナの少年との柔道交流について報告させていただきます。当法人は2006年4月の創立以来、多くの方々や企業からご支援をいただき今日に至っています。元トヨタ自動車株式会社社長

で経団連会長も務めた奥田碩様をお招きして同年11月に第1回目の講演会を開催しましたが、つい先日のことのように思い出されます。昨年の7月には私と井上先生

の2人でパレスチナを訪問し、その後、多くの方々との協力をいただきながらイスラエル・パレスチナの中学生を日本に招き、約2週間に渡って柔道交流を実施いたしましたので、まずはその経緯などについてご報告いたします。その後、昨年の3月1日に中国・南京に開設した二つ目の日中友好柔道館において橋本敏明副理事長が講習

会・講演会を行った報告をし、その後には井上先生の講演会に入りたいと思います。

ではまず、昨年12月にイスラエル・パレスチナの子供たちを受け入れた模様をNHKで報道された際の映像を見ていただきます。イスラエル・パレスチナ交流事業に関係する記事がお手元に渡っていると思いますが、お時間があればそちらもぜひお読みいただきたいと思えます。

（VTR上映）

ここで1点修正があります。彼らを招へいしたのは、本法人であり私個人ではありません。一番大事な説明が不足していました。ここで修正いたします。

昨年7月、井上先生と2人でイスラエル・パレスチナを訪問したというニュースは世界中のマスコミで放映され、各国から「山下、いいことやっているな!」という声をいただきました。その後、9月にIOC（国際オリンピック委員会）のジャック・ロゲ会長がイスラエル・パレスチナを訪問しましたが、先の我々に関する報道を

受けてのことかどうか分からないものの、非常にうれしかったです。

私がいままで長くお話しすると井上康生先生の講演時間が短くなり、非難を受ける恐れがありますので（笑）、簡単に申し上げます。



12月17日にはパレスチナのチームから8名、イスラエルから9名が来日しました。12月19日には東海大学の望星学塾を訪問し、イスラエル・パレスチナの子どもたちを含めて総勢150人以上で稽古を中心とした交流を行いました。翌20日には、日本外国特派員記者クラブでプレス・カンファレンスを実施しました。

プレス・カンファレンスでは両国の団長がともに、「パレスチナとイスラエルを自由に往来できる環境が、スポーツを通じて1日も早

く実現することを心から願っている」と発言されていたのが印象的でした。



その後は講道館を訪問して嘉納行光名誉館長を表敬、日本の子どもたちも交えて柔道を通じた国際交流を行いました。



この日は外務省と国際交流機関にも表敬訪問しましたので、非常にタイトなスケジュールでした。21日には広島を訪問。今日は欠席しておりますが、当NPO法人

の理事である加藤暁子様から両方の国の子どもたちに広島を見学させてはどうかという提案があったことを受けてのものでした。時間的に余裕の少ないスケジュールでしたので、広島に行くには21日の朝一番の飛行機に乗り、夕方には広島を発って福岡に入らなければなりません。しかし、こんな強行日程では我々の売名行為だととらえられかねないとの危惧から、両国の方々に「もし希望があれば、広島も訪問予定に入れます。ただし、そうするとスケジュール的に大変厳しくなります」と話をしましたところ、すぐに「どんなにきつくなってもいいから、ぜひ行きたい」という返事をいただいたのです。

広島では、まず秋葉前市長を表敬訪問し、平和記念資料館の見学や原爆死没者慰霊碑への献花などを行いました。パレスチナ代表の「原爆を受けながらも廃墟から立ち上がり、これだけ素晴らしい都市を作り上げた日本の姿は、私たちの未来への可能性を感じさせる」という言葉には、非常に感動

しました。



翌日は福岡県大牟田市内の白光中学校を訪問し、交流しました。VTRにもありましたが、23日から25日まで柔道教室にも参加し、その後、宗像市で開催された柔道大会にも出場しました。



イスラエルの選手は皆、気合いを入れて丸坊主で出場しました。その姿にはびつくりしましたが、彼らは見事フェアプレイ賞に輝きました。

移動のバスの中では、パレスチナの選手は前に、イスラエルの選手は後ろに座り、お互いにほとんど言葉を交わすことがなかった両チームですが、大会後には一緒に記念写真を撮り握手をしました。

普段は決して交わることのない両者が、十分ではないにしても心を通わせて何かを感じることもできたのではないかと思います。

このような活動に取り組むことができたのも、普段からご支援いただいているメンバーの方々のご尽力、あるいは協賛企業の方々のお力の賜物です。この場をお借りして、心よりお礼を申し上げます。

しかし、これで我々の活動が終わったわけではありません。今年もイスラエル大使館と協力しながら、パレスチナの体育館に柔道場をつくれぬか、畳だけでも提供できないか、という話を進めています。また、日本から指導者を派遣したり、イスラエル・パレスチナの指導者を子どもと共に受け入れるなどということも、ぜひ進めていきたいと思っています。

最後になりましたが、光本事務局長は12月17日にイスラエル・チームを成田で出迎え、28日にパレスチナ・チームを見送るまで、ずっと両国のチームと行動を共にしてきました。また、東海大学の学生ボランティア4名も、つねに両チームに付き添ってくれました。

これらのことに感謝申し上げて、イスラエル・パレスチナの子どもの招へい事業に関する私の報告を終わりにしたいと思います。何か質問などございましたら、この後の交流会でお尋ねいただきたいと思えます。ご静聴、ありがとうございました。

司会…ありがとうございます。それでは続きまして、本法人、橋本敏明副理事長より、中国・南京市「日中友好南京柔道館」の訪問報告をさせていただきますと思えます。

「日中友好南京柔道館」訪問記

橋本敏明

ただいまご紹介にあずかりました、副理事長の橋本です。

先ほど山下理事長の話にもありましたように、今日は山下理事長と私・橋本が井上先生の前座を務めます(笑)。また、10分くらいでなるべく早く終わるようにと事務局から指示が出ておりますので、簡潔にお話させていただきます。

私からは、特に中国・南京市との交流についてお話しいたします。後ほどご紹介があるかと思えますが、本日、会場には青島の日中友好青島柔道館の館長をはじめ、皆さまがお見えです。この連休に私どもは学生・大学院生を引率して青島を訪問してりましたが、今日はあらかじめ、「南京の話をお話します」とお断りしております。

さて、その前に少しだけ山下先生のお話を聞いてイスラエルとパレスチナの件で、私も思い起こしたことがありますのでお話しします。最初に受け入れをした望星学塾の松前柔道塾は私が運営責任者なのですが、子どもたちと練習している時、イスラエルの先生が通訳を通して「先生、日本の道場には子

どもたちの笑顔がありませんね。練習中に笑顔が生まれるのは良いものです」とおっしゃいました。よく見ると、イスラエルの選手にもパレスチナの選手にも笑顔がない。その時に、柔道の練習をしている子どもたちの笑顔こそが平和を象徴しているのではないかと思えました。イスラエルの先生は「子どもたちが笑顔で練習できるようにしてあげたいです」ともおっしゃっていました。私たち日本の指導者といえども、これは大切な視点なのではないかと思えます。



南京の道場にも笑顔がありました。この写真(右)は、日中友好南京柔道館が設置された南京市の重競技運動学校に入ったところです。

若いころに東海大学で柔道の

練習をされたこともある館長の劉先生に、この学校はどういうものかと尋ねましたところ、柔道とレスリングとボクシングの3競技について江蘇省内から徹底的に優れた選手を集め、合宿生活で鍛えるスポーツ訓練学校とのことでした。格闘技一つをとっても、設備が大変充実したこのような施設があることに驚きました。日中友好南京柔道館も、こちらを活用する方たちで運営されています。

2010年度の交流は、年末の訪問となりました。2011年3月には東海大学OBでびわこ成蹊スポーツ大学の村田正夫先生を派遣したのですが、ちょうど南京の日本文化週間の最中で、11日には日中友好南京柔道館開館1周年の記念行事が執り行われました。そこで模範演技をする指導者を派遣してほしいという要請がありましたので、村田正夫先生にお願いした次第です。これも皆さまの支援のもと、本NPO法人の事業の一環として、させていただきました。

次に道場の施設について、簡単

にご説明申し上げます。  
入り口を上がると左側が男子の道場、右側が女子の道場です。



それぞれ公式の競技場が3面ずつ取れるようになっており、三百畳以上の広さを誇る立派な道場です。日中友好南京柔道館は女子の道場を整備して設置されたものですが、東海大学の女子柔道部など大学の施設とは比較にならないほど立派です。



この写真(右)は、女子の乱取

りの練習と、同行した大学院生が寝技の入り方の指導をしているところ。皆さん大変熱心で、すでに国際大会で活躍し、日本のトップ選手と覇を競っている強化選手が何人もいます。

道場には日中友好南京柔道館の趣旨や練習時間、嘉納治五郎先生の精神である「精力善用」「自他共栄」といった言葉が書かれたプレートがきちんと飾られています。週2回、夕方から夜にかけて練習があるのですが、皆さん大変礼儀正しい上に明るく元気です。



この常東(チャンドン)という先生と、本日出席していただいている青島の王華さんという先生は、東海大学で6カ月間、指導の研修を受けられました。その時の責任者は私でしたから、子どもたちの指導についていろいろ伝授したのですが、「その内容どおりに教えて

います」という報告を受けました。



写真(右)は後ろ受け身の練習をしているところです。南京の道場には、南京在住のアメリカ国籍、韓国籍の方がいらつしゃいました。南京は国際都市ですから、中国の方以外にも柔道を習いたい方が来ているのだそうです。そんなことから、日中友好南京柔道館が今後、国際クラブになる可能性は、十分にあると思われました。

この写真(右)は、村田先生の



美しい内股の模範演技、それから大学院生による寝技の入り方の指導です。今の日本の中学生、高校生、大学生の中で、この子どもたちのように必死で練習する学生はいないのではないかと思えます。こんなに真剣な眼差しに日本でお会いすることはありません。私をはじめ多くの皆さんの記憶に残る、かつての日本の青年たちが持っていた「何かを学びたい」という熱気をここではひしひしと感じました。



これは講演会の様子です。この期間に合わせて、江蘇州の柔道指導者約30人を集めて研修を実施しました。柔道の精神や考え方について講演をしてほしいということで、兎沢さんという日本人会の会長さんの通訳で私がお話しさせていただきました。



この写真(右)は、1周年記念の際、村田先生が(株)ユニクロ様にご提供いただいた記念品のTシャツを贈呈しているところです。今回、私は研修や指導をする立場でしたが、日本に仏教の戒律を伝えた鑑真和尚の地・揚州へ赴きたいという私の念願を、「車だと三時間ほどで行けますからご案内します」と、大明寺まで案内していただきました。念願を叶えていただき、私にとって学びの旅となりました。遣唐使船の模型を見たりしながら、日本に修業の方法を伝えた鑑真和尚を通し、日中の交流について話し合いました。

南京にある長城では、今、世界遺産に登録しようという運動があるそうです。魯迅の小説にも登場する豆を食べて老酒を飲んだという有名な店で、我々も大変美味しい老酒で乾杯しました。繰り返しになりますが、南京の道場は施設面がとても充実しており、60名いる会員も熱心に柔道を学んでいます。保護者の方々もよく見学にみえます。また、この施設そのものが省の強化選手を集めた日本というトレーニングセンターになっていきますから、練習に従事するたくさんの人々のために宿舎も食堂も完備されており、自分のないトレーニング環境が実現されています。

そのような中で日本の心を伝えることが私たちの役割であり、今後も柔道を通して日本と中国、特に両国の青少年や子どもたちの交流を深めることができるように努めていきたいと考えています。人と人との交流ですから、一粒ずつ丁寧に種をまき、実りを重ねなければなりません。そして、いずれ大輪の花を咲かせるように力を尽くしていく所存ですので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。簡単ではございますが、以上で南京の報告とさせていただきます。

ありがとうございます。司会…どうもありがとうございます。ではここで、井上康生先生の講演に移りたいと思いますが、その前に少し、井上先生のご紹介をさせていただきます。井上先生は現在、東海大学体育学部で講師をされております。この4月から教員として大学にいらつしやっています。廊下で「井上康生だ」とささやかれている声をよく聞きます(笑)。また、全日本柔道男子チームの強化コーチとして、来年のオリンピックに向けて遠征などで海外を駆け回っております。

先生は2009年から2011年にかけて、JOCの海外研修プログラムで英国に留学されました。現地では英語の研修とイギリスのコーチング法の習得に加え、今後の先生にとり大変大きな意味を持つであろうコーチ間のネットワークづくりに尽力されてきました。

それでは皆さま、拍手をもって

お迎えください。井上康生先生です。

## 「英国帰国報告」

## 2年間の留学を語る

井上 康生

皆さん、こんばんは。ただ今ご紹介いただきました井上康生です。

このたびは山下先生が理事長を務められているNPO法人柔道教育ソリダリティーに講演者としてお招きいただき、大変光栄に思っております。またお足もとの悪い中、ご多忙の中、たくさんの方々にご来場いただき大変感激しております。

その反面、上司であり恩師でもある山下先生や、母のように慕っている光本さんのご依頼とはいえず、なぜこのような大仕事を引き受けてしまったのかと、この場に立っていながら後悔しているところがあります。

本日は、私が2年間英国でどのような生活をして何を感じ、何を得たのかを皆さんにご報告させていただきます。

一言で申し上げますと、己の無知さを痛感した2年間でありました。これは決して悲観的な言葉で

はありません。英国の語学、文化、宗教、哲学、思想、そして柔道の

指導法や練習法、技術の差などに触れ、世界は広くそして深く、まだ見ぬ多くの宝物が眠っているなという印象を受けました。

さらに細かな話をさせていたいただきたいと思いますが、皆さまご存知のとおり私は話のプロではなくただの柔道家でありますので、聞きづらかったり、意図が伝わりづらかったりすることもあるかと思えます。最後までお付き合いいただければ、大変ありがたいと思えます。

また、諸先輩方の前で言うのもおかしな話ですが、私自身の話が今後の本NPOの活動にお役に立てば、これほどうれしいことはありません。ではこれから、詳細な報告会に移らせていただきたいと思えます。

## 英国2か所の研修拠点

まずはこの写真から始めたいと思えます。

皆さん、この恰好をご存知でしょうか。これはスコットランドの

伝統的な民族衣装の「キルト」というものです。



「郷に入れば郷に従え」という言葉があるように、英国に行った以上は英国人になり切ってこの2年間を過ごそうと心に決めて降り立った私の意志を表現するために、最初にこの写真を紹介させていただきました。上はジャケットですが、下は実はスカートなのです。決してその道に走ったとか、そういった趣味があるわけではありません（笑）。

私は文部科学省所管の日本オリンピック委員会海外研修生として、英国で2年間の研修を行いました。その目的は、外国語スキルの教習、選手の力を伸ばす効果的なトレーニング・指導のノウハウ

に関する研修、諸外国選手を対象とした技術・指導の実践的研修、ジュニア・クラスからシニア・ク

ラスまでの育成方法と教育方法の視察・研修、英国ナショナルチームの組織体制の視察・研修などでした。その他、柔道以外でもさまざまな経験を重ねました。

また、先ほど光本さんからお話があったとおり世界をまたに掛けた幅広いネットワークづくりにも従事しました。2012年にはロンドンでのオリンピックを控えておりますので、全日本強化コーチとしてより多くの情報を得るための海外研修でもあったわけです。

さて、研修期間は平成21年1月11日から23年1月11日までちょうど1年間でした。皆さまご存知かと思いますが、英国はイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドと4つの国から成り立っています。私はスコットランドのエジンバラとイングリッシュのロンドンで研修を行いました。

1年ほど過ごしたエジンバラには、ジョージ・ケア先生がいらつしやいました。先生はヨーロッパ柔道連盟の副会長をされていたこともあり、現在は英国柔道連盟

の会長でジムやジュニア向けの柔道道場も経営されています。現役時代はヨーロッパチャンピオンをはじめ、数々のタイトルの手にした優れた選手であり、指導者としてもオリンピック選手を育成するなど輝かしい経歴をお持ちです。

昨年は柔道界の最高段位である十段をお取りになり、エリザベス女王から英国で3番目に高い格を誇る「大英帝国第三級勲位」を授与されました。日本でも柔道の普及・指導、および柔道を通じて日本との人的交流の促進が認められ旭日小綬章も受章されています。私や山下先生をはじめ数多くの柔道に携わる先生方を迎えられると思いますし、ヨーロッパだけでなく世界の柔道家に多大なる影響を与えています。

ロンドンでは武道会という道場でお世話になりました。こちらのオーナーであるブライアン・デビスさんとの話では、そこがヨーロッパ最古の道場なのだそうです。最近の調査では、オランダに最古の道場があるとの指摘が出てきているようですが、まだ確定し

た情報ではないようなので武道会の先生方は「うちが最古だ」とおっしゃいます。この道場では、山下先生をはじめ数多くの日本人柔道家の先生たちが私と同じように研修を行い、さまざまな研さんを積み重ねてきたという経緯があります。

以上のようなことから、私自身が掲げた目標を達成できる場所と考えた上でエジンバラとロンドンという、二つの地を選ばせていただきました。後輩で、女子柔道界で今年まで選手として汗を流していた塚田真希選手も、今年の夏以降は私と同じような形で英国をはじめとした諸外国で研修を受ける予定になっています。

### 英国での研修の様子



ここにジュニア・クラスを指導している写真（左上）がありますが、エジンバラとロンドンでどのような研修日程をこなしていたのかをご説明します。

午前中は基本的にランゲージ・スクールに通い、積極的に英語の勉強をしていました。渡英した当初は、お恥ずかしい話ですが英語を駆使する語学力はゼロに等しかったです。

「イエス・オア・ノー」、それくらいしか話せませんでした。英国の友人に、「来た当初は、俺がいくら質問してもお前は笑顔でイエスカノーしか言わなかったから、コミュニケーションの仕方がまったく分からなかったよ」と言われたほどです。

この時、語学力を身につけるには努力が必要なのだというのを感じたと同時に「センス」が多少なりとも影響を持つのだと思いました。

さて、センスとは何か。それはよくしゃべるといふことです。そこで笑っていらっしゃる光本さんは英語がペラペラなのですが、決

して光本さんがおしゃべりだと言っているわけではありません（笑）。しかし、よくしゃべるほど、英語習得が早いというのは実感しました。

ランゲージ・スクールではいろいろなディスカッションをする授業があったのですが、ヨーロッパの方々とアジアの方々が混在するクラスの中で、アジアの方々には人が発言した後にものを言うようなスタイルがある一方、ヨーロッパの方々はおかまひなし。相手の発言に対しても質問をたくさんかぶせてくるのです。

そういう人々の中で半年間過ごしました。午後はエジンバラ柔道クラブや武道会の道場で、指導と練習を行いました。週2〜3回のペースでアドバンスクラスという上級者クラスに参加したり、ジュニア・クラスやビギナーズ・クラスにも週に2回くらい参加しました。この写真に写っているのは、小学校低学年くらいでしょうか。エジンバラクラブは柔道の専門的なクラブチームですが、武道会はよりビジネス的な要素を取り入れ

た経営をしていると感じました。これは武道会の道場で撮影した知的障害者クラスの写真（左）です。私は日本でこのようなクラスに参加することがありませんので、大変新鮮でとても良い勉強になりました。



週に1回開かれていて、激しい運動こそしないものの基本的な技のかけ方や押さえ込みの指導のほか体力作りのために走ったり、時には相撲をしたりもしていました。その他、女子だけの練習クラスもありました。私は特別にそこにも参加させていただいたのですが、日本では見られないクラスのあり方にまたひとつ勉強させていただきましたという思いでした。

道場では他にも社会貢献活動の

一環として、練習に支障がないようおもちゃなどを使った子どもや赤ちゃんを遊ばせるプレイグループという活動も行われていました。また、柔術や合気道、空手など、柔道以外のスポーツにも道場が活用されていました。

練習のシステムは、日本とよく似ています。それは多くの英国の先生たちが日本へ修業に來られているためであり、数多くの日本の先生たちが英国で指導を行っているためでもあるでしょう。武道会という道場も、もともとは小泉軍治先生が日本から渡英して設立したものです。先ほども申し上げましたが、この道場はヨーロッパ最古と言われておりますから、この道場から英国全土に柔道が広がりヨーロッパにも及んだという流れになっています。

ちなみに英国同様、現在の柔道界をけん引する国の一つであるフランスでも、最初に川石酒造之助先生が柔道を広められました。フランスの柔道人口は50万〜60万人といわれており、日本の約3倍にあたります。

練習システムの違いはさほど見受けられませんが、コーチングという部分では多少なりとも違いがありました。日本には先輩・後輩という考え方がありますが、海外にはありません。先輩にあたる人が指導を行うこともありますが、強いプレッシャーをかけたり練習を押しつけたりする姿勢はほとんどありませんでした。英国は日本に比べ、より自主性を求めます。選手一人ひとりにものごとをしつかり考えさせて強化していくというのが、主なやり方なのです。

私自身、いろいろな国で柔道指導を行ってきましたが、英国では、子どもから大人まで本当に多くの人々がよく質問をしてくれます。自分が納得しなければ行動に移らないのです。たとえば柔道で相手を投げるときには「相手の手を引っ張らなくてはいけない」という話をすると、「なぜ手を引っ張るの？」と聞き返してくるので「相手を崩すためだよ」と答える、といった感じですが。このように疑問に思ったことは、とても細かいと

ころまで質問してきます。そして自分なりに納得がいくと、その後の理解度はとても早く、スムーズに効率よく技術や考え方を身につけていきます。加えて、最近では日本でもよく言われることですが、短所を修正するよりもいかに長所を伸ばすかに指導の重点を置いていきます。英国の人々はよく褒めます。日本では悪い点を直すことに力を注ぐ傾向がありますが、向こうの先生方は、良いところを褒めて褒めて褒めちぎって能力を伸ばしていきます。これは家庭教育の場面でも見られる光景です。研修中、たくさんのご家庭やホームパーティーに招待されたのですが、その際に肌で感じました。もちろん、悪いことをすれば叱りますが、どんな時でもまず本人にものごとを考えさせるという姿勢があるのです。

英国で柔道にチャレンジする人々にも、強くなりたい、相手に勝ちたい、という思いが当然あります。道場の中ではマナーや規律を守るなど、柔道の精神も十分に理解しています。しかし、日本人



に比べて柔道をよりスポーツとして捉えていると感じました。競技として勝敗だけを追い求めて柔道をするのではなく、生涯楽しむスポーツとして柔道に親しんでいるといった感じです。そのため、三十歳〜五十歳になってから柔道を始める人が多く、武道会では、中高年向けのクラスもありました。

先日、私の人生に多大な影響を与えて頂いている、また、これからも頂き続けるであろう最も尊敬する山下先生の師である佐藤宣哉先生が練習中に私を呼びました。真剣に耳を澄ませていると「お前と俺が初めて練習したのがいつか覚えてるか」と質問されました。「高校生の時でした」と答えますと「あのとき、俺が何歳だったかわかるか」「五十一、二歳だったと思います」「そうだろう。その俺がまだまだこうしてやっているんだ。だからお前も五十歳までは現役でやれ」。佐藤先生から、そういう指令を受けたのです。さすがに五十歳まで現役は、と躊躇したのですが、私自身も柔道が好きで現役の選手を退いても練習を続けている

身ですから、これからも自らの体で指導出来る限り続けていきたいと思えます。

ここで、研修期間の私生活についても少しお話しさせていただきます。学校の勉強だけではなかなか実践的な英語は身につけませんので、パブでビールを飲みながらフィッシュ・アンド・チップスを食べたり、おいしいレストランで食事をしたりしながら柔道の仲間たちとたくさん楽しい会話をしました。エンジンバラでは、週末は必ずどこかの家で開かれているというくらいホームパーティーが盛んで、妻や子供とよく参加させていたいただいたことは、良い思い出となっています。

また、イギリスといえばゴルフ発祥の地でありゴルフがとても盛んなので、私もチャレンジしてみました。「スコアはどれくらいで回るのですか？」という質問は控えていただけると助かります。なくしたボールの数さえわからないくらい腕前なのですが(笑)、プレー自体はとても楽しかったので、できる範囲で今後も続けていきたい

と思っています。

渡英後1年間は、基本的な語学力を身につけることに集中していた時期で、エンジンバラ以外の地方で柔道の指導を行うことはありましたが、英国以外の国へはあまり行きませんでした。

### 米国での研修と交流活動

2年目に入ってからには諸外国で指導を行うことが増え、全日本の強化コーチとしての活動も始めました。本当に多くの国に行き、貴重な経験をさせていただきました。

私は少しでも柔道界に貢献したい、柔道の発展に役立ちたいと思ってきました。また、山下先生や橋本先生のお話にもあったように、柔道を通じて平和に貢献できないかという思いを抱きながら研修の日々を送りました。

2009年ロッテルダムの世界選手権で日本男子チームが金メダル獲得ゼロという厳しい結果に終わったとき、それもふまえたアドバイスとして、「日本柔道が危機的状況にあるのに、海外で柔道の

指導をしている場合か」という厳しいご意見・ご指摘をいただいたことがありました。

そのとき私は、すぐさま反論しました。柔道は相手を倒すことだけが目的でもありません。もちろん畳が上がった以上は勝ちに行く。これが私の東海大学での、また全日本の強化コーチとしての使命です。全力で倒しに行くことが相手に対する敬意の表明だからです。そして、海外にも同じ心を持つ柔道家はたくさんいます。お互いを高め合うことができるのが柔道であり、それが自他共栄の心である。ですから海外で柔道を指導することにはきちんとした意味があると申し上げました。

山下先生のお話にも出ましたが、柔道の対戦相手は敵ではないのです。私の意見をどこまでご理解いただけたかは分かりませんが、このご指摘をいただいた後も、今申し上げたことを自分に言い聞かせながら自信を持って活動続けました。この活動を通して、少しでも柔道界に恩返しができたことを願うばかりです。

これはスイスで柔道の指導を行った時の写真（左）です。



こちらの写真（左）は米国・ワシントンです。



このようにいろいろな国で柔道教室を行いました。一回に約200人〜300人、多い時には600人ほどの受講生が集ってくれました。

皆さん、日本の柔道を愛し、目標を持って向上していこうとする人々ばかりでした。そのような人々に出会えただけでも私にとっては収穫だったと思いますし、今

後も機会があれば積極的に続けていきたいです。

これは米国メリーランド州でアナポリスの海軍士官学校での写真です。もともと海軍士官学校と柔道には深いつながりがあります。



講道館四天王の一人である山下義韶先生がルーズベルト大統領の前で演武や試合を行った際、大統領は山下先生の柔道に感銘を受け、海軍士官学校に柔道の教官として2年間お招きしたのです。そして私は、戦後、海軍士官学校に招待された初めての日本人柔道家となりました。

まず大ホールに通されたのですが、「シドニーオリンピック金メダリストが来ました」というアナウンスとともに入場し、4600人もの人々に拍手で迎えられまし

た。ホールの中央まで先導された後は、皆さんとともに昼食をとりました。その間、設置されていたモニターに私が全日本選手権で鈴木桂治選手と戦った決勝戦が放映されていました。私が内股で投げたシーンでは、大歓声と大きな拍手が沸き起こりました。これは、いまだに忘れられない素晴らしい経験でした。



私が訪問した2010年は、ちょうど日米安全保障条約締結50周年の年でした。海軍士官学校の招待を受けるにあたっていろいろな調整をして下さった産経新聞の方は、「井上君はアメリカだけでなく世界で柔道着を担いで、柔道によって日本の文化を発信している。これは大変素晴らしいことだ。私が思うにこれは柔道外交だよ」と

言ってくださいました。このような言葉をいただけただけことは、一生忘れないでしょう。大変ありがとうございました。

私はただ柔道が好きなのです。そして、私と同じような志を持って柔道を修めようとする多くの人々に、できるかぎり貢献したい。また、現在の私があるのも柔道のおかげですから、その柔道に少しでも恩返しがしたいのです。

海軍士官学校だけでなくワシントンやニューヨークなどでも柔道指導を行ったのですが、ワシントンでは、新興地域の学校で指導を行いました。周辺のエリアとは違い、やや荒んだ雰囲気のあるところで、学校付近では小学生ぐらいの子どもがヘルメットもかぶらずにボロボロのバイクに乗って、すごいスピードで私たちの車を追い越していきました。学校に入つてすぐのところには「学校にドラッグを持ち込むな」という貼り紙がしてありました。こういう光景を見ることは日本ではもちろんありませんでしたから、衝撃を受けました。

学校に来ているのは、柔道を見たこともしたこともない子供たちだったので、デモンストレーションを行ったり、柔道とはどういうものかという話をしたりしました。子供たちの柔道着等は特に用意していなかったのですが、せっかくの機会ですから子供たちにわずかも柔道に興味を持ってもらいたい、組むことで何かを伝えたいと思ひ、軽くではあります、投げたり投げられたりという交流をしました。

会ったばかりの子供たちは、今を生きることに精一杯で、希望や目標を持ってないような暗い表情をしていました。しかし柔道を通じて交流の後は、少し未来が開けたような表情に変わっていたのです。柔道は面白いし、機会があったらやってみたいという声も上がりました。これはうれしかったです。柔道に親しんで欲しいのはもちろんですが、子供たちが柔道以外の道でも夢や希望が持てるような生き方を見つけることができれば、彼らの未来は確実に変わってくるだろうと感じました。

このツーショット写真(左)の方は、カナダの柔道ナショナルチームのヘッドコーチです。

私が2010年1月にモントリオールで柔道教室に招待されたときに撮影したものです。



彼は実は、私がシドニーオリンピック

ピックの決勝戦で内股で投げたしまったニコラス・ギルという選手なのですが、彼からの依頼でこの教室への参加が実現しました。現役時代は選手として、また現在はコーチとしてライバル関係にあるわけですが、柔道教室が終わった後、別れ際に彼は「康生とは今も昔もライバルだが、お前と俺の気持ちはたぶん同じだろう。これからも柔道の発展のためにお互い頑張っていこうな」と声をかけてくれました。この時ほど、対戦相手はただの敵ではないと感じたことはありません。やはり、仲間なの

です。それをあらためて感じました。

**世界平和と柔道普及を目指して**



先ほど山下先生からお話がありました。イスラエル・パレスチナへの訪問は、テレビで見ると同じように、両国間に深い溝

があり、民族的または政治的にいろいろ問題を抱えています。実際に現地へ足を運びましたが、パレスチナは高い壁に覆われて閉ざされたような国でした。この地で、いろいろな活動に携わることで、私の人生に新たな道を切り開く大きな機会を与えていただいたように思います。

滞在最終日にイスラエル・パレスチナの合同練習会がありました。

両国の子どもたちの間には、目には見えない隔たりがあるのでしよう。せっかくの合同練習にもかかわらず、組み合わせたくない。その中でイスラエルの先生が気を遣って「お互い組み合わせたらんない」という号令を出しました。

そうして徐々に慣れてくる中で、イスラエルの選手がパレスチナの選手を投げた時、それまでは投げてもそのままだったのにイスラエルの選手が手を差し伸べて起こしてあげたのです。次にパレスチナの選手がイスラエルの選手を投げたときには、パレスチナの選手が手を差し伸べました。

このシーンを見たときに、柔道とは本当に素晴らしいものだと感じました。また、スポーツの中でも、とりわけ柔道には平和に貢献できる力があるのだと感じました。柔道を通じて平和に貢献するとう希望や願望が、この時、確信に変わったのです。もちろん、柔道による交流だけですべてが丸く収められるわけではありません。しかし、何かを始めなければ平和は実現しません。その「何か」が、

NPO柔道教育ソリダリティーや山下先生の活動を通じて始まったのではないかと思えます。今後、私自身がそういった活動に少しでも貢献できるようになりたいとあらためて感じました。

いろいろな写真をご覧いただきましたが、私は第二の柔道人生を歩み始めています。五歳のときから柔道を始めましたから、柔道一色でここまでできました。第一の人生では現役の選手として、精一杯戦ってきました。今は東海大学の講師や全日本の強化コーチとして、また、ありがたいことに総合警備保障株式会社の師範として残っていたりしており、この三つの仕事に一生懸命取り組んでいるところです。正直なところ、指導者や教育者に足を踏み入れたばかりの私には、どのような指導者になればいいか、どのような人間になればいいか、明確なものは見えていないところです。しかし、皆さまのご支援のおかげで人にはできないような経験をたくさんさせていただいておりますので、まずはそれらを実践で活かしていく所存

です。選手たちにも、「指導者としての自分は始まったばかりだから、みんなと一緒に成長できればうれしい」と思っている。迷惑をかけることもあるとは思いますが、お互い頑張っていこう」という話を、よくします。

東海大学に入学し、教育を受けたことを幸せに思います。私が最も尊敬する山下先生のもとで柔道に携われることに對しても、幸せを感じています。これまでもこれから、たくさんの方々の支えられる人生だということを自覚し、皆さまのご期待にそえるような人間になれるよう、一心に励んでいきたいと思えます。

最後に、家族についてですが、英国に渡ったのち、エジンバラで長女を生みました。と言っても、私が生んでわけではありません(笑)。

2人目の子どもも、英国で授かりました。妻が「妊娠して出発して、妊娠して帰国するなんて」と恥ずかしそうにしていました。が、「恥ずかしがることはない。充実した生活の賜物だよ。自信を持つ

ていいんだ」と私は言っています。子育ての難しさを感じてはいますが、一人とも順調に育っています。どんな時も、私の活動には家族の存在がとても大切です。仕事にも、家族にも精一杯、取り組んでいきたいと思えます。

私の拙い話を最後までご静聴いただき、本当にありがとうございます。

司会…井上先生、ありがとうございます。井上先生が柔道を通して素晴らしい交流をされてきたことに、とても感動いたしました。ありがとうございます。

この後、交流会を開催することになっておりますが、それまで10分ほどお時間がございます。交流会に出席なさらない方で井上先生にご質問がある方がいらっしゃいましたら、挙手でお知らせいただけます。お願いします。どなたかいらっしゃいませんか？

### 質疑応答

A…平塚の湘南校舎にある武道館に、稽古でよくお邪魔している山

口と申します。本日は貴重なお話をいろいろとさせていただき、ありがとうございます。ロンドンの武道会のお話が出ましたが、これは民間セクターの中では非常に立派な道場だと思います。また、ヨーロッパには柔道が大変普及していることもよくわかりました。

そこで、教育機関での柔道の普及に関する質問です。アメリカのウエストポイントやイギリスのポーツマス、海軍兵学校などで柔道を奨励しているのはわかるのですが、ほかの高等教育機関や大学などで授業として柔道を取り入れているところがありますか？ フランスだと、ナポレオン戦争の頃から発展してきた軍関係の大学で週6時間ほど柔道が取り入れられていると聞いたことがあります。

井上…イギリスで軍や警察関係の施設が柔道とリンクしている光景は、よく目にしてきました。私が当初お世話になろうとしていたバース大学は、パブリック・バスを起源に持つ地方でもあり、スポーツに大変力を入れている大学で柔

道部はナショナルチームのメンバーを数多く輩出しています。イギリスには柔道の大学選手権があり、そこで優勝もしています。しかし全体的に見ると、日本に比べて教育機関との結びつきは希薄です。中学校から大学まで、幅広い教育機関と柔道をリンクさせていきたいという話は、多くの先生方から出ているのですが、なかなかうまくいっていないようです。

A…ありがとうございました。

B…西村と申します。世界各国の柔道愛好者と実際にお会いになってみて、日本の柔道に何が求められているとお感じになりましたか？

井上…どの国の選手もコーチも日本の柔道を愛し、尊敬し、目標にしていると感じました。だからこそ、その思いに沿うだけの柔道家を育てていくことが、海外の皆さんの期待に応える重要なことだと思います。山下先生のお言葉ですが「私は最強の柔道家を育てたい

のではない。最高の柔道家を育てたい」という表現を、私もよく使わせて頂きます。ただ柔道が強い人間を育てるのではなく、人間味にあふれ誰からも応援されるような柔道家を一人でも多く育てることができれば、柔道界の発展に大きく貢献できるはずだと思っております。そのためには自分自身も勉強し、成長し続けなければならぬと感じています。

司会…それでは時間になりましたので、これで終了させていただきます。井上先生、ありがとうございました。

交流会に出られない方もおられますので、ここで少しご紹介させていただきます。橋本副理事長のお話にもありますが、本日、青島の日中友好青島柔道館から館長の徐殿平先生がおみえになっていきます。こちらは通訳の時峰さんです。ホームページなどでたびたびご紹介させていただいておりますが、王華さんにも交流会にご出席いただけるようなのでそちらで思

います。

本日は雨にもかかわらず、本当にたくさんの方々においでいただきまして、心より御礼申し上げます。本法人は、今年度も皆さまのご理解とご支援のもと、たくさんの事業を進めていきたいと思っております。今後とも、よろしくお願いたします。どうもありがとうございました。

\* \* \*

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局 0463-58-1211 (内線 3524) までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。また、ホームページからもダウンロードすることが出来ます。

<http://npo-jks.jp>